

『女学雑誌』を視座とした明治二二年の文学論争

— 女子教育界のモラル腐敗をめぐる同時代言説との交錯 —

屋木瑞穂

はじめに

五月 此頃「女学雑誌」頻りに文学を論じて「美即ち善」の説を主張

す 極実派の反動漸く起らんとす

九月 女学雑誌大に小説及び小説家を論ず極実小説の弊漸くあらはれ

んとす

(「明治廿二年文学上の出来事年表」)

右は、坪内逍遙が明治二二年の文学界の動向を振り返って『読売新聞』(明二三・一・二三)紙上に掲げた記事である。十川信介氏もすでに指摘しているように、逍遙が五月欄の記載で「極実派の反動」として捉えた「美即ち善」の説とは、『女学雑誌』主宰者の巖本善治が鵑外と応酬した「文学と自然」論争(明二二・四〇六)において主張した文学観を端的に表したものである。周知のとおり巖本の発言は、鵑外の「善外に美なしとすれば善と美との区別も立たず」(『国民之友』五二、明二二・六)といった反駁を招く。さらに続けて巖本は、約四ヶ月後再び「極実小説の弊」(前掲記事「九月」欄)を論駁し、文学における「理想派」「実際派」の概念をめぐって内田魯庵や石橋

忍月と「小説論略」論争(明二二・六〇一〇)を展開する。こうした論争を契機に噴出した写真派或いは人情世態小説への批判は、二二年末から二三年にかけて「文学極衰」論となって顕在化していくのである。

従来、「自然と文学」論争から「文学極衰」論争へといたる流れの背景には、旧幕以来の経世済民の思想と逍遙以降の新たな審美的文学観といった価値観の対立の構図があることが指摘され、近代文学の成立と密接に関わる転換期として先学者によって層の厚い研究が積み上げられてきた。特に「自然と文学」論争については、鵑外自身が「明治文学の批評の上にて善と美とを分ち、審美学の標準を以て批評の本拠とした」(『しがらみ草紙』二八、明二五・一)嚆矢と意味づけられた通り、近代日本文学における「美」の領域の自律の出発点という歴史的意義が認められてきた。しかしその一方で、文学の倫理的価値を問題視する巖本の主張は、功利主義的文学観の残滓として比較的単純に割り切られてきたことは否めない。

そこで改めて問いたいのは、女子教育家巖本善治の文学面での発言が、明治二二年になって集中的に現れる事に何か重要な意味はないのだろうかということである。国木田独歩は明治二二年の社会現象を振

り返つて、

教育界を暴らしたる、彼の女学生に対する醜聞は、其の風説にしろ虚報にしろ、以来女学生貴婦人の行為挙動に、壮嚴肅整を帯びしめしや明なり：(略)：吾国民の心憶に注入されたる徳義の觀念は、蓋し非常の者ならむ

(「感ずる処を記して明治二十二年を送る」、『女学雑誌』

一九三、明二二・一二)

と特筆している。従来この時期の文学論争周辺の問題を対象とした研究においては殆ど考慮されることがなかったが、同時期のジャーナリズムを賑わせていた女子教育界におけるモラル腐敗をめぐる問題は、一連の論争を通じて〈文学〉の実社会に対する意義、そして作家の倫理的主体のあり方を問う巖本の姿勢に深く関与していたのではないだろうかと推測される。本稿ではこうした観点に立って、概念領域の未分化による境界認識の曖昧さのゆえに、文学論争の呼び水となった『女学雑誌』の動向を窓口としながら、〈文学〉に関する言説を女子教育をめぐる同時期の社会的諸言説との関わりを視野に入れながら考察したい。

一 「文学と自然」論争の背景

1 社会現象としての「くされたまご」

—モラルの腐敗をめぐる社会的言説—

明治二二年四月から六月にかけて行われた「自然と文学」論争の主な争点は、巖本善治の主張する「最大の文学は自然の儘に自然を写し得たるもの也。極美の美術なるものは決して不徳と伴ふことを得ず」

(「国民之友第四十八号文学と自然」、『女学雑誌』一五九、明二二・四)という文学観の是非にあった。従来も指摘されているように、巖本が〈文学〉の美醜を判断する際に倫理的価値基準を持込み、真善美は「究極する所るに於ては皆な渾然一体」(「国民之友第五十号に於ける『文学と自然』を読む、を謹読す」、『女学雑誌』一六二、明二二・五)であるとして「美」の領域の自律性を認めていないことが、鴟外の反駁を招く根本的原因であった。ここで問いたいのは、なぜ『女学雑誌』主宰者である巖本の文学面での発言がこの時期に集中的に現れ、〈文学〉の倫理性を問題化する必要性があつたのかということである。従来この論争の背景には、娼娼問題や「忠臣蔵」のお軽役を辞退した団十郎の女郎蔑視の発言をめぐる巖本と忍月の対立、美妙の「胡蝶」(『国民之友』三七、明二二・一)に添えられた裸体画の是非をめぐる論議などが複雑に絡んでいることがすでに指摘されている。しかし、これらの事象と並んで、嵯峨の屋おむろの「くされたまご」(『都の花』九、明二二・二)が言論社会に及ぼした影響は、一大契機として注目する必要があると思われる。

「くされたまご」の主人公松村文子は女学校の教師であり、「耶蘇教信者」であることを公言して道徳論を振りかざす女性である。しかし、「外部を飾つて内々醜行を極めてる利口な人とは違ます」といった言葉とは裏腹に、校長の息子宮川と親密な交際をしているのみならず、鉄道馬車で出会った少年を下宿に誘うという淫乱ぶり、最後の

場面では杯盤狼藉の果てに同衾しているところを情夫の校長に発見されてしまう。校長が腐った玉子を投げつけると、「悪臭汚穢」が瀰漫する。そこで語り手は次のような社会批判を述べる。

皮相より見る時は頗る美しきものにして腐れざる鶏卵と異ならねど、一たび其皮を破ぶり其内を窺へば一身唯是腐敗の塊……悲哉聖者の遺教さへ、軽薄者流の玩具となる今の世の中、嗚呼案じらるゝ世の行末

石橋忍月の的確な評言を借りれば、「内外表裏言行相反せる中等社会、しかも教師宗教家を以て自任する或る部分の人々の醜行劣情を罵倒した」(『嗟峨の家氏の『くされ玉子』、『国民之友』四三、明二二・三) 作品であった。批判の眼が向けられたのは閨房描写で、忍月は「其形をむきだし過ぎて読者の感情を損し嘔吐を催さしむるなきに非ず」と難じた。彼が「端正高潔なる女学雑誌記者をして之を読ましむれば嗚呼の長嘆息を發して一ツの大なる苦勞を増さしむる」であろうと予想した通り、巖本善治は「文章上の理想」(『女学雑誌』一五二、明二二・三) を掲げて次のように激憤をあらわにした。

高尚なる文学の好みは一方に於て甚は遅く進歩しつゝ、浮薄なる文学の好みは一方に於て甚は早く進歩し来るが如し、都の花第九号「くされ玉子」の如きに至ては其の尤も甚だしきものか：(略)：堂々たる東都一二流の小説雑誌に於て、夜闔両枕あり淫少年しだらなく辱に入るの事を細叙して載するに至りては、文学社会の空氣亦た毒を極むと云ふべし

右の發言に續けて、西欧社会では「不道德文書の毒害」を批判して「法令を嚴にして如此き著作の出版及び販売を禁止」しようとする動

きがあることを伝え、「社会の清徳を汚がすの書類とあれば女性は敢て之を読まざるは固より、尚ほ嚴しく之を責めて天下に訴へ、其の批評を公衆に暴露して四海を警醒する」ことを提言した。さらに、「真成の文学は道念の反射なり」と唱えるが、これが約一ヶ月半後に「文学と自然」論争の契機となる「極美の美術なるものは決して不徳と伴ふことを得ず」という主張につながっていることはいうまでもない。また非難の焦点が閨房描写にある点においては、裸体画に対する倫理的批判と共通の姿勢を見出すことができる。実際『教育』(明二二・四・二五)の批評欄に掲載された「裸胡蝶の好一对」という一文は、巖本の「くされたまご」批判が裸胡蝶論議と結びついた問題であることを鋭く指摘している。

しかしそれ以上に注意したいのは、巖本のやや過剰なまでの反応の根底には、「女徳を傷くるを恐るゝより出てしもの」(『都の花の腐れ玉子と女学雑誌』、『日本之女学』一九、明二二・三) という指摘もあるように、「くされたまご」の出現を突破口として西欧式女子教育に対する社会的批判が一気に噴き出すのを危惧する心情が働いていたのだらうということである。似非耶蘇教信者である女学校教師の醜態を赤裸々に暴く小説を黙視できなかつたのは、『女学雑誌』主宰者である巖本のジャーナリスティックな感覚が、女学校教育の腐敗を攻撃する機運の高まりつつある現状を察知していたからであろう。

次いで巖本は「小説家の着眼」(同一五四、明二二・三) を発表し、小説家が社会の「実相」を描写する際には「如何なる着眼によりて之を觀之を写せりや」という点が問われねばならないと指摘し、『実を写せり』と云ふに止まる「小説に対する不満をあらわにした」。

同時期に硯友社系雑誌に連載された小説に目を向けると、ジャーナリズムで好奇の視線に晒された女学校風俗を素材とした作品が目立つ。例えば、紅葉の『風流京人形』（『我楽多文庫』一）『文庫』一八、明二一・五（二二・三）は、「開花女学校」を舞台に教師二宅嬌之助が「開化」といふ容色」を誇る女生徒辰巳永代に抱く恋情を主軸に描いたものである。「紅い薔薇」を受け取った永代の行為を、「二世を契りしるし」と嬌之助は思い込み、『梅曆』の公式」を応用するかのよくな卑劣な行為を働いたことが醜聞沙汰となり、「免職は靚面」の事態となる顛末が嘲弄的に描かれている。ヒロインの女学生を憐れむべき被害者と捉える視線は見られず、作者は級友の口を通して永代が「肉体の美」のみで「精神の美」に欠けた「フール（愚鈍）」であると暴露させ、末尾では「眉目よければとて人形へ恋」をしたために社会的名譽を失墜した嬌之助を嘲笑している。こうした視点で描かれたとき、教師の邪心を疑うことを知らぬ永代の「あどけなき娘気」は、道徳的判断力をもたない「人形」のような他動性が戯画的に強調されて、浮薄さを際立たせてしまう。忍月はこの作品を評して、「姦淫を写すも罪悪を描くも只小説家の心底眼中に一ツの意匠あり目的ありて之を記せし所以の注視点を示すが故に不潔の文句も人を害せずして能く活動」するが、「ボンヤリ然として之を写せしは是れ小説界の悪戯感なり」（『文庫』の京人形）、『国民之友』四七、明二二・四）と作家主体の欠如を痛烈に批判した。魯庵も同様に、「道徳の分子を含まざるラブは野卑猥雑」（『紅葉山人の『風流京人形』』、『女学雑誌』一五七、明二二・四）であると非難している。両者の批評には、巖本の「着眼」重視とつながる姿勢が見られるのである。

また延春亭主人「散浮花」（『我楽多文庫』五）『文庫』一七、明二一・八（二二・三）は、男女学生の世態風俗を描いた小説である。「今は綻んとする初花色香に迷ふ蝶に誘れて情の海に散浮く」といった作品の題名に関わる修辭が暗示するように、主人公の女学生は書生との交際が友人に吹聴されて醜聞沙汰となり、退学処分を受けるといふ窮地に陥る。養母に咎められた彼女は、寄る辺ない思いを「寄生木」と題する詩に託して『女学雑誌』に投稿するといった筋だが、この作品でも恋愛に翻弄される軽佻浮薄な女学生像が浮き彫りになっていく。

初期の硯友社系統の作家が『小説神髓』の「模写」理論の影響を受け、その実践をめざしたことはよく指摘されるが、女学生風俗を「傍観してありのまゝに模写」しようする創作態度が生み出す類型的イメージの力が、作者の意図に関わらず、女学世界のモラルの頹廃をめぐる社会的言説の形成に何らかの影響を及ぼしていく可能性をほらんでいたことは否定できないであろう。

こうした中で、「くされたまご」は、文学領域に止まらず新聞紙や教育系雑誌などにおいても重大な社会現象として喧伝される事態となった。「くされたまご」という言葉は文学作品の題名であることを越えて、「表は如何にも清らかにして、裏はいと濁れる偽善」（明二二・四・二五『教育』）的な女子教育界の現状を強烈なイメージで喚起し、さらには四月に発覚問題化した東京府会議員の収賄事件と相俟つて道徳の頹廃した時代風潮を表象するキー・ワードのように社会的に機能していった。例えば、明治二二年四月二一付『東京朝日新聞』掲載の「腐敗」と題した社説記事では、新吉原の貸座敷賦金をめぐる賄賂風

説を糾弾した際に、

口に清潔を称して行に汚穢なるものあり政治的に社会的に皆滔々として『くされ玉子』の亜流に外ならざればなり天下皆酔り天下皆濁れり：(略)：吾人は敢て正義を楯とし公明潔白、天下公衆に訴へて世の腐敗を救済するに躊躇せざるべきなり

と慨嘆している。また三日後の同紙掲載の社説「徳義之欠乏」では、社会は滔々として益々不徳義の濁海を流れ去るなれ：(略)：人間の養育所たり人才の製造所たる教育的の世界に於ても亦滔々として皆然るなり：(略)：人間を以て機械と為さんとする所の教育は遂に幾多の『くされ玉子』を作れり

（傍線は引用者による。以後適宜付した傍線等については注記を略す。）

と、教育界における徳義の腐敗が痛烈に批判されている。さらに少し後になるが、『貴女之友』五七号（明二二・六）に寄稿された「なみだ」と題する記事にも、「海外出稼醜業婦」の問題を敷衍する際に、「我が邦腐敗の卵子は破裂溢泄し、飛んで数千里外の文明国の中心迄を穢すに至りたるか」と「くされたまご」の比喩を用いた記述が見られる。こうして「くされたまご」の出現は、女子教育界におけるモラルの腐敗現象をめぐる社会的言説を誘発する一つの契機となったのである。

2 「濁世」と女学校醜聞問題

明治二二年において女学校批判や女学生醜聞報道の導火線となった

のは、『改進黨新聞』に四月から五月にかけて連載された須藤南翠の「濁世」である。「濁世」は「くされたまご」を先行作品として強く意識したところに成り立つた小説である。四月六日付の『改進黨新聞』には「女子教育に付て新任文部大臣に望む」と題した論説が掲載され、次のように記されている。

近頃の女学校の模様には何か気に食ぬ廉があると見えて：(略)：「濁世」と申す小説も書き初められ居る場合なり：(略)：嗟哉の舍おむろ先生の著はせる「くされ玉子」と申す小説も何れかの女生徒か女教師かの上において事実を本にして起草されしとやらに承はるが：(略)：一般女子の手本ともなるべき女子を作り出さうと云ふ所の女学校が風儀紊乱して却つて悪き手本を出すと云ふ様なことが屢々起る様ではナンとしても慨嘆せざるを得ず

ここでは注目すべきことに、「くされたまご」に描かれた女教師の醜行の（事実性）が強調されている。筆者は右の文章に続けて、「淑女らしく見せかけて居て内幕に入り込んで見ればイヤハヤお話しにもナンにもならぬ」といった女徳の頹廢を嘆き、「弊害の根を探究して之を剷除し以て不評判を消さざれば一体の教育の上に甚だしき影響を及ぼすべきなり」と社会に警鐘を鳴らした。このように「濁世」には、女子教育界の墮落した内幕と偽善を暴露するという明確な意図があった。四月一四日付『改進黨新聞』には、「濁世ですか何所かの女学校の悪口らしいのね」「此の続きものゝ学校の様にお嬢さんが芸者の真似た様なことをして殿方の相手をすればナマジツカお金を使つて茶屋遊びをせなくても済むと云ふんでせう」といった噂話のようなス

タイルの文章（「にやこく」）が掲載されており、「濁世」という小説の（スキャンダル性）を前面に掲げて社会の関心を煽動しようとする戦略が伺える。

「濁世」の主な登場人物は、「東京貴婦人学校」校長の理学博士刑部襄一、同校講師の法学博士水澄富貴、女生徒梁ヶ瀬順子、その友人浅池秀乃、秀乃の養母で「聖婦学校」校長の浅池いな子、同校で「看護学」を教える医学生星川晃哉、牧師神郷徳義らである。この作品の本意は、これらの登場人物の道徳的な仮面の裏側に隠された醜悪な実態を嘲罵的な筆致で描くことにある。例えば、第一七回では「くされたまご」の趣向を下敷きにして、基督教信者である「聖婦学校」校長浅池いな子が、医学生の星川を自宅に招いて杯盤狼藉の果てに淫らな姿態をさらしているところを、「酒気紛々」としてやってきた隣家の牧師神郷に目撃されるという場面を描いている。また、貞節な糟糠の妻を「儒教主義の余毒」（第四回）と尻目にし、自由恋愛に憧れて社交界に奔走する女生徒の順子と親密な交際をする刑部校長や、同女生徒に「円遊会」で言い寄る水澄講師（第一〇回）に関しては、「人の模範となるべき者が、我が情欲に制されるやうでは所詮人を熏陶する事は出来るものでない」（第一八回）といった露骨な批判を浴びせかけている。

ところで、作品の主要人物である刑部校長のモデルは東京高等女学校の矢田部良吉であり、例えば第一四回には「基督教を採用して、神の敬すべき事を知らせ……（略）……徳操を研ぎ完美を願ふとした方が、最も現時に応用する教育法」であるといった刑部校長の主張が記されているが、こうした「基督教の効用」は矢田部良吉の女子教育論の特

徴であり、事実『女学雑誌』一四一号（明二一・一二）には「女学校の耶蘇教」と題する彼の演説筆記が掲載されている。作者は、実際の事象を織りませながら小説を展開させることで、スキャンダラスな波紋を社会に投じたのである。こうしてこの小説は、女子教育批判や女学生醜聞報道を煽るきっかけとなり、女子教育界のみならず社会全般を「濁世」イメージで染め上げていった。

『女学雑誌』一六三号（明二二・五）では、「何等の怪報ぞ」と題して『大同新報』五号に掲載された一文を時事欄で紹介した。同記事は「濁世」を「高等の教育を授くる一女学校の内幕を描写」した作品であるとし、登場人物に関しては「皆靡徳醜行……（略）……而して表面には善行の容子を作る人々なり」と述べている。さらに『女学雑誌』記者はこの一文と並べて、『日本』に掲載された「女生徒の品行」を誹謗する雑報記事を紹介し、その内容が「濁世」にみられる描写と酷似していると報じた。

さらに、高等女学校教頭能勢栄が『国の基』第三号（明二二・六・一）に、「教育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂げんとする者は如何なる男子に嫁すべきか」という論説を発表したことが、女学校攻撃に拍車をかける要因となった。その論旨は、極言すれば女学生の結婚相手には「文学士か或は理学士を撰ぶこと適当ならん」というものだった。女学校の教頭が結婚媒酌人のような発言をしたことで非難が殺到し、これを契機に女学校をめぐる醜聞は加速度的に増大した。その内容が真実か否かは全く二の次で、女学生の醜態を徹に入り細を穿って報道するという風潮が社会に蔓延したのである。

『国の基』事件は風刺画の題材にもなり、六月二九日刊『團々珍

聞』には女中たちが悪臭漂う「腐れもの」(「女学校豆入り」) 高等女学校の媒酌問題、「鯉節」 新吉原の賄賂事件などを暗示) を片つ端から処分するという挿絵が掲載され、醜聞の続出する社会の腐敗イメージが強烈に視覚化されている。また六月一日付『東京朝日新聞』には社説「女学校の醜聞」が掲載され、次のように報じた。

女学校に関する忌はしき話、婦人會に於ける癩に障る噂は実に今にはじめたることにはあらず……(略)……遂に「くされ玉子」となり「濁世」となり「国のもと」となり高等女学校における醜聞

とはなりて世説紛々たる浅猿しき仕義とは成り果てたるなり……

(略)……女学校は神聖なり女生徒は清廉なりと云つて白ぼつくる

こと能はず……(略)……女学校の醜態女生徒の腐敗茲に至つてまた極まれり

『国民之友』記者は「女学の驚慌」(五四、明二二・六)という記事掲げて、「女学校に関係する者は、男子に勁節の男子なく、女子に貞淑の女子なく、殆ど之を挙げて畜生界に墜落したるものと看做」され、「女学雑誌記者迄が斯かる風説の犠牲と為りたる」現状を憂慮すべき事態であるとし、その「病根」を「精神的教育を欠きたるに因る」と説いた。さらに同月一五日発刊の『以良都女』二四号に掲載の寄書は、「小説は時事を写し人情を照らすの鏡です。今日の日本は変遷の時代道德萎微の社会、濁世の如き事實は起り易い時代です」と述べ、そうした弊害を防ぐ方策として「女学校の職員並に教員を悉く女子にすべし」などと極言している。こうして「濁世」は「腐れ玉子」同様に、道德の頹廢した時代の風潮を象徴的に表すイメージとして社会に流布していったのである。

以上述べたような動向は、同時期に併行して「自然と文学」論争を行っていた巖本にも十分に意識されていたと考えられる。忍月の「美術を宗教的道德的の窮屈なる範圍内に零枯せしめんとする歎」(「時事新報と女学雑誌に質す」、『国民之友』四八、明二二・四)という詰問や鷗外の「善外に美なしとすれば善と美との区別も立たず」(「再び自然崇拜者に質す」、『国民之友』五二、明二二・六)といった批判に端的に示されるように、文芸批評の言説を道德に関する社会的言説から切り離そうとする文学者の新たな動きと交渉するなかで、巖本があえて文学の倫理性に固執せざるを得なかつた背景には、(モラル腐敗)を歎ずる空気が現実社会に蔓延していたことを考慮する必要がある。

「濁世」のような「徹頭徹尾敗徳乱倫の人物を写すを以て主眼」(「改進新聞小説坎珂山人著濁世を読む」、『女学雑誌』一六九、明二二・七)とする小説が世間の耳目を聳動し、女子教育界の墜落した風俗に對する暴露趣味的な関心が注がれる中で、巖本は現実社会の醜惡な「実相」を写すことのみに終始する小説への批判意識を強めていったのである。

二 「小説論略」論争前後

1 女学生風儀問題と同時期の小説

「くされたまご」及び「濁世」といった小説の出現、さらに高等女学校醜聞事件を契機とした女学界のモラル頹廢の社会問題化は同時期

の小説の書き手にも衝撃を与えた。新聞や雑誌の紙面にそうした情報があふれている中で、作家もまたそれを素材として作品の中に取り込んでいった。例えば、「くされたまご」の影響が色濃い作品に、花村居士「両面鏡」(『都の花』二二二・二四、明二二・九一〇)があるが、教会の祈祷会における二人の信者の次のような会話が写し出されている。

「彼の或る新聞の如き女学校のとばツちりより我々神聖なる教会までも攻撃を試み、神の限りなき栄光を汚さんとするに至るは憎むべき次第やありませんか。」

「或る書生の如きは我々教会へ集るのを以て若き男女の見合処か何かの様な妄想を抱いて居る様な人物があります。：(略)：精神の墮落も又甚だしいぢやありませんか。かう云ふ様な始末ですから世は益々澆季に、人情益々輕薄に流れ、徳義の如きは殆ど地を払ふてないのです。」(第八回「写し出す宗教家の裏表」)

当時『東雲新聞』(明二二・六・二三)をはじめ各紙に報じられた「高等女学校校長の演説」の記事には、「各教会に就て実地を探访せよ恐らくは耶穌基督を信するよりは寧ろ情夫情婦に合せん為め佳人才子を得んために参集する人多きを見る…(略)：我国の婦徳壞乱甚し」といった教会非難が見られるが、作者は明らかにこうした風説を踏まえて描写している。作者は先に引用した会話文に続けて、「表面は堅きもなかは実にくされ玉子」という修辞を用いながら、「道徳堅固」にみえた二人の男性も実は「女学生」めあての「偽信者」であったことを暴露するという趣向で、人間の裏表を「両面鏡」のように照らし出しているのである。

山田美妙は「いちご姫」の序文(『都の花』一八、明二二・七)において、「社会の不徳を写す照魔鏡を持たなければ坎珂、嵯峨の屋の伯父御(波線部筆者注)「濁世」「くされたまご」の作者を示す)のやうに腐敗を責める力」はないと主張し、「主人公のいちご姫は表面は貞操に見え、淑徳の備はつた婦人と思はれてもその実は非常な―思切つて淫婦である」というのが作品の「主眼」であると明言している。このように小説の機能を「社会の不徳を写す照魔鏡」として捉え、淑女の内幕を暴くというモチーフは、「わいるとむウあ、ほオる」(『都の花』一六〇一八、明二二・六〇七)においても執拗に繰り返されている。

また翌年になつてもこうした傾向は続き、例えば松江釣史「時事小説 室の早咲」(『都の花』三〇〇三五、明二三・一〇三)においては、『国の基』に掲載されて女学校醜聞の火種となつた能勢栄の論説記事が、主題と密接に関わる素材として取り込まれている。「当世風の教育」を受けた女主人公が、「ふみのつかひ」第三号に掲載された「教育ある女子安全なる夫を撰ぶの論」に感化されて、地方政治をめざす清廉潔白な志の男性との結婚を思い直し、「舞踏の名人と聞えた月下文学士と色野理学士」等と「当世風の交際」に「奔狂」し、「輕薄社会」の寵児となつて浮薄さを露呈していく過程が嘲笑的な筆致で描かれている。

同時期のこのような傾向の作品から窺い知れるのは、作家主体が社会現象と距離をとれないままに、新聞報道や雑誌が流布させていく女徳の「腐敗」や人情世態の「浮薄」を批判する社会的言説の磁場に絡めとられていたという事実である。

2 「意匠清潔、道念純高」なる小説の提唱

高等女学校醜聞問題以降、教育界においては、小説が社会道徳を腐敗させ、青少年の心に悪影響を及ぼすのを危惧する論調が急速に高まりつつあった。例えば『少年園』一八号（明二二・七）には、論説

「小説に対する女子教育の注意」が掲載され、次のように述べている。
小説の毒に至ては、実に社会を腐敗せしむるの恐れあり。……

（略）……年少社会の情感を攪乱し、意志の堅実を喪失せしめ、妄想の奴隷、異感の犠牲たらしむるの不吉不詳招けばなり。就中妙齡女子の如き、若し淫猥なる小説の爲め、一たび其潔白純情の情感到、汚穢の点染を受けんか、終に之れを回復し能はざるなり

また、『女学雑誌』一七八号（明二二・九）には楽山生の筆なる「小説を読む者の心得」と題する論説が掲載されている。これは、「東京高等女学校の一件より或雑誌記者先生の女生徒の徳義のかく腐敗せしは全く小説の害なり」といった論調が見られるのに対して、小説の効用を訴えた一文である。筆者は、小説を「想像小説（又極美小説とも云ふ）」と「実際小説」とに二分類し、前者は「完全無欠の人」を主人公として「読者をして其心術の善良なると言行の端正なるとに則らしむる」もので、後者は「不完全有欠の人」、すなわち「濁世中の刑部襄一梁瀬順子の如き類」を主人公として「読者をして其心術の不良なると言行の不端正を戒しめしむる」ものであるとした。要するに、旧来の勸懲主義的文学観と何ら変わらない発言であるが、看過できないのは「小説の害」をめぐる問題が教育界で時事的話題とな

っていたという事実である。

巖本が「小説論略」（『女学雑誌』一七七、明二二・八）を発表したのは、まさにこうした状況の中であつたことに留意したい。彼は、「実際派」と称する小説は「人事社会の實際を写し、勉めて人情の有的まゝを穿がつ」ものであるというが、それならば「科学」「歴史」「伝記」の記述とどう異なるのかという問いを發し、小説は「想像によりて製作」するものだから本来「自然の儘、實際の儘」であるはずはないと述べる。さらに彼は、「大いなる想像、高き理想、非常なる結構を見て、之れ實際に非ず、小説に非ず」とする現今の小説家の「眼識の狭隘」さを批判し、「實際世間の外に一個の所云る詩世界、小説世界なるものを造立」するのが真の「文学」であり、「味わるゝこと充も深く、益すること尤も大きく、化する所る尤も高」い、「意匠清潔、道念純高なる小説」こそが最良であると提唱した。

この巖本の「実際派」への批判を、先述したような当時の教育界が直面していた問題と切り離して考えることはできないであろう。彼の観点からすれば、「濁世」に典型的に示されるような現実社会の醜惡な現象を写し出すことのみに専念する「実際派」小説には、現実に対してどう立ち向かうべきかという「理想」が見られず、読者の意識を情緒的に救い上げるような視点が欠落しているものと思われたのである。そこで彼は、「文学」が情操面に働きかける力に目を向け、人間意識を浄化するような「文学」の創出を求めたのである。美的であることと倫理的であることが同一の線上で扱われ、「文学」が人間形成との関わりで論じられているという意味でまさに「教育的」な言説であるといえるが、同時期の保守的教育家の小説有害論や旧弊な勸懲主

義的文学論と比べれば明らかに一線を画するものであったことは考慮する必要があると思われる。

周知のとおり、巖本の道徳的傾向を帯びた理想偏重の文学観に対して、文学自律論の立場から鋭く反駁したのは内田不知庵^{（1）}だが、彼は『女学雑誌の小説論』（『東京輿論新誌』四二二、明二二・九）において、「世間が『エデン』の花園ならば兎もあれ濁世に濁世の分子を含む文字あるは不思議でもなし……（略）……今日の真相を描かんには純潔な理想では扱もく」と皮肉を述べた。さらに『小説論略』質疑一（『女学雑誌』一七九、明二二・九）の中では、「小説を読むに道徳書と同様に考へ神と云ふ字信心と云ふ句がなしとて是は最高の意思純潔の結構にあらずとせば恐らく及第するの小説なかるべし」と述べ、巖本の主張を「哲学書をも修身書をも小説をも美術をも混同」するものとして痛烈に批判した。また翌月もこの論争に介入し、巖本が「小説論略」で主張した「小説の目的」について、「益すること尤も大に化する所を尤も高きを目的とするは小説に限らず理化学、医学、倫理、教育、地理学等万般の書皆な多少其目的」^{（2）}『女学雑誌社説』『小説、小説家』、『国民之友』六二、明二二・九）があると反駁し、〈文学〉概念の境界認識の曖昧さを衝いた。

しかしこれらの反論に対して巖本は、「自己の心中に一定の理想をも所持せず、たゞ実を写し悪を暴ばき徒づらに世の喝采を望みて其他に大ひなる希望なき人々の小説に至りては、余之を蛇蝎よりも悪むべし」（『申し開らき條々』、『女学雑誌』一八〇、明二二・九）と抵抗の姿勢を保持し、「實際派のみ重んぜんとす誤謬」（『謹んで龍背に申す』、『女学雑誌』一八二、明二二・一〇）を繰り返し主張したので

ある。

ところで、この巖本の発言の約一ヶ月後、平岡敏夫氏が「当時の文学像に関する貴重な証言^{（3）}」であると指摘するところの、中西梅花の「風流伝」評が『読売新聞』（明二二・一〇・一七）紙上に現れている。その文章の中で、「趣向は学校、主人公は束髪^{（4）}の令嬢、文法は無法にあらざれば小説視せられざる今の世」といったような人情世態小説に対する批判が述べられているが、この時期いかに「女学校」が小説の陳腐な素材と化していたかということを実に示している。

こうして明治二二年後半、巖本は「小説論略」を通して俗悪な風俗の描写にとどまる〈實際派〉に対するアンチテーゼとして「意匠清潔、道念純高」なる小説を提唱し、作家主体の現実社会に対する倫理的姿勢のあり方を問うた。その意識の根底には、先述したように洪水のごとく押し寄せる醜聞報道によって誹謗中傷の的となった女学校が「小説の種本製造所」（明二二・六・二五『教育時論』）と化し、好奇の眼差しに晒された女子教育界を素材にして風俗批判の隠れ蓑の下に男女の痴情を穿つことで、読者の卑俗な興味に阿ねるような小説が量産されていくことへの憂慮があったのだと考えられる。さらに彼は、〈文学〉の情操教育的機能に着目し、社会の変革に必要なイデオロギーとしての認識を強めていくことになる。『女学雑誌』の基本的文学路線となる「意匠清潔、道念純高」なる小説が、明治二二年末から二三年にかけて、「文学極衰」論者による「坪内氏が率先し来れる人情小説」（明二三・二・一二『国民新聞』）に対する批判の声が高まる中で、どのような具体的かたちをとって顕在化してくるのか、その展開については今後明らかにすべき課題として残されている。本稿で考察した

ことは、そうした潮流を形作っていく複雑な諸相の一面面にすぎないが、〈文学〉がいかに同時期の他領域の諸言説と交渉しながら、その意味や価値が問われていくのかという問題について考える糸口とした。

〔注〕

(1) 十川信介「文学と自然―想実論をめぐる―」(『日本近代文学』

一八六七・一一)。後『ドラマ』・「他界」 明治二十年代の

文学状況(筑摩書房、一九八七・一一)収録。

(2) 例えば、「啓蒙家たちの志向した近代と文学的近代の断絶」

(越智治雄『浮城物語』とその周囲)、明治文学全集・「矢野龍溪集」筑摩書房、一九七〇・一一)、「逍遙が設定した『美術的の文学』の路線」と「経世済民を志す『上の文学の伝統』」

の対立(前田愛「近世から近代へ―愛山・透谷の文学史をめぐる―」(『講座日本文学』近代I、三省堂、一九六九・四)、

「雅俗二つの立場が完全に賞揚されなかつたこと」(中村幸彦「近世的なるものの否定の様相」『国文学』一九七六・八)な

どの図式が示されている。尚、十川信介氏は『ドラマ』「他界」明治二十年代の文学状況(〔注〕(1)参照)の序の中で、

「硬軟、新旧東西の価値観によつてそれを割り切ることはできない」と単純な図式化への疑問を提示しており、示唆的である。

(3) 「文学と自然」論争の細かな展開については、十川氏の前掲論

〔注〕(1)参照)、高田瑞穂「鷗外における『文学と自然と』」

『成城国文学論集』一九六九・一一)、小川武敏「裸胡蝶論争

から文学と自然論争へ―想実論の一環として」(『文芸研究』一九七八・一一)などの論考に詳述されている。

(4) 高田氏、小川氏前掲論〔注〕(3)参照)。

(5) 『女学雑誌』一六九号(明二二・七)掲載の批評「改進新聞小

説坎珂山人著濁世を読む」によれば、『改進新聞』一八一九〜一八六三号までの三八回にわたつて連載されたようだが、管見に入つたのは一八二〇号(明二二・四・三)第二回から一八四

二号(明二二・四・三〇)第一九回までで、これ以外は欠号。

尚、藤井淑禎氏の『浮雲』の四年間・II―流行世相を軸に・2―(『東海学園国語国文』一九八一・三)は、『浮雲』第三

編以降のお勢像の変容を分析するに際して、「濁世」を契機とした女学生醜聞問題の影響を指摘している。

(6) 明治二二年六月一日、『教育報知』一七二号掲載の「濁世を如何せん」という評論には、次のような記述が見られる。

ア、世は濁りぬ、之を如何せん。今は独り道德家のみならず、学者も、事務家も、猫も杓子も、お玉杓子も皆之に和せざるはなし……(略)……節操と説きて節操を破らしむる講師。男女の同権を唱説しながら却つて男女の玩弄物となる女流。凡そ此等の如きは世間稀有の事にあらずと云へり。ア、宗教家の道德、倫理家の道德、大学士の道德にして此くの如くなれば道德の点に於ては何物も頼みになる物はなきなり

また文学作品では、嵯峨のやおむろ「野末の菊」(『都の花』一九二四号、明二二・七・一〇)に、女性主人公が学ぶ東京

の女学校の清浄な雰囲気を表現するのに、「此学校は遠く世間と懸離れて居るので、濁世の風も高い寄宿舎の窓を吹かねば」という修辭が用いられている。

(7) 明二二・六・二一『郵便報知新聞』紙上では、問題となった能勢栄の論説を紹介している。また同記事は、能勢栄の免職を報じた。

(8) 例えば『読売新聞』掲載の「女学生の悪評」(明二二・六・八)においては、「下宿屋で夫婦気取」をする女生徒の醜聞が報じられ、また「女学校と女生徒」(明二二・六・九)は、「近来女学生の品行は言語道断」であると述べ、「耶蘇教会に園遊会に男子を同行同伴し往て奇異の縁を結ぶ」といった墮落現象を慨嘆している。

(9) 例えば、文廼家たより「ためいき」(『大和錦』一〇、明二二・九)では、束髮娘が温泉場で「八畳一間を借りきつて。オニイムーン(婚姻旅行)だとの触れ込み」で紳士風の書生と「悪巫山戯」しているのを目撃した温泉客が、女学校醜聞事件を引き合いに出して噂する光景が描かれており、また「女文覚」(『新小説』一三〇一七卷、明二二・七・九)では、東京遊学を切望する娘の両親が「高〇女学校」を勧められると、「あれは文学士と理学士の妻君を養成する所じやとの評判が新聞にあつた」と危惧の念を抱く様子が書き込まれている。

(10) 美妙は翌年一〇月、再び女学校醜聞を素材にして、「嫁入り支度に教師三枚」(『新作十二番の内』、春陽堂)と題する女教師の墮落物語を発表している。その跋文で美妙は、「書き倦きた

束髮のふしだら、既に言文一致の小説には是が付き物のやうに言はれる処を……(略)……これを悪口の言ひをさめとして折角御ゆるし願ひます」といった断り書きをしている。巖本はこの作品について、「人の臟腑を解剖的にさらけ出すことは、高尚なる文士の天職にあらず」(『女学雑誌』二三七、明二三・一一)と痛罵した。

(11) 高橋一郎氏は「明治期における『小説』イメージの転換―俗悪メディアから教育的メディアへ―」(『思想』一九九二・二)の中で、明治二〇〇三〇年代の『教育時論』において年を追う毎に激化する小説批判の背後には学生風紀問題が広く社会問題化していた状況があったのだとし、教育者たちは「小説をはじめとする当時の新興メディアを風紀問題の元凶とする」ことよって、「全体社会の学校教育批判に抗しよう」としたのだと説いている。

(12) 「小説論略」の論争における内田不知庵の文学観については、野村蕃氏が「近代文学史認識の留意点(上)―不知庵批評の問題を例に―」(『文学』一九六四・八)において詳述している。

(13) 『日本近代文学の出発』(塙書房、一九九二・九)。

〔付記〕本文の引用は原則として旧字を新字に改め、ルビは省略した。

(やぎ みずほ)